

言語はグローバル化すべきか ーグローバル化に適応しつつ母国語を保護するにはー

M,K〈福祉・国際異文化・政治経済ゼミ②〉

1. はじめに

海外からの旅行者の増加や海外への移住の増加など各方面でグローバル化が進んでいるなか、日本でもカタカナ語が多く使われるようになり、義務教育での外国語の教育が義務化されるなど言語もグローバル化していると言えるだろう。また、言い換えれば日本語が英語に侵略されているとも言えるかもしれない。一方で、国立国語研究所(2022)は「現在、6,000から7,000ある世界の言語のうち、半数がこの100年のうちに確実に消滅し、最悪の場合10分の1にまで減る」と示している。また、UNESCOは「消滅危機言語」としてマイナー言語の保護・継承活動を行っている。こうした状況に対し筆者は、そもそも言語は消滅してはいけないのか、保護する必要があるのか、という疑問をもった。そこで本研究は、①言語は1つに統一されるべきか、母国語を保護するべきかを明らかにすることを目的とする。加えて、UNESCOによると、ある言語が存続の危機から消滅に至るまでには5つの段階があり、第2段階である「明らかな危機」以降に分類される言語は、すでに子どもが学ばなくなってしまった言語であるという。そこで母国語を保護すべきという結論になった場合、②日本はどのような言語教育政策を行うべきなのかを明らかにする。

施光恒氏は「グローバル化」と「国際化」は区別するべきであるとしていて、グローバル化を「国境の垣根をできる限り引き下げ、ヒト、モノ、カネの流れを活発化させる現象、およびそうすべきだという考え方」、国際化を「国境や国籍は維持したままで、各国の伝統や文化、制度を尊重し、互いの相違を認めつつ、積極的に交流していく現象、およびそうすべきだという考え方」と定義づけている(施2022)。これらの定義と、広辞苑による「世界規模になっていくこと、世界全体に渡るようになること」というグローバル化の定義を言語にも適応させ、「言語の境界を引き下げ、世界全体で一つの言語が使われること」と新しく定義づけた。なお、世界規模になる対象は世界で最も公用語として使われている英語とする。

2. 方法と仮説

2.1 方法

- (1)言語のグローバル化と国際化のそれぞれに対するメリットとデメリットを挙げる。
- (2)言語政策が異なるマレーシアとシンガポールを比較した上で、日本の言語教育のあり方を考察する。

2.2 仮説

グローバル化することで通訳が要らなくなったり、国際的な

場で数国の言語が使われるなどの不平等がなくなったりするため、このままグローバル化は進み、最終的には1つに統一されるだろう。

3. 調査結果

3.1 メリットとデメリット

グローバル化が極限まで進み、全ての国で同じ言語が使われるようになった場合、メリットとして、どこの国へ行っても通訳が不要になることや、現在国際連合で5、6カ国語のみが使われているような不平等が解消されることが挙げられる。一方で、デメリットとして、もし統一されても時間が経つにつれて方言が現れ、再び分裂することが考えられる。さらに、地理状況が各地域で異なることで同じ言葉でも解釈の違いが生まれる、各語族のアイデンティティやプライドを傷つける恐れがあるなど、それぞれの国の今までの歴史や風情をなくしてしまうことで倫理的にも受け入れられないと考えられる。且つ、自由に言語を選択することができる言語権が奪われてしまう懸念もあり、これらを乗り越えたとしても統一までに膨大な時間がかかる。加えて、統一された言語が母国語である語族とそうでない語族との間に不平等が生じてしまう。1887年に母国語が異なる人々の間での意思伝達を目的として人工的に作られたエスペラント語には、言語と結びつく文化がないため人々に浸透してこなかったといわれている。

国際化は国境を維持したまま交流が行われるため、自国の言語を守りながら積極的に他言語を学ぶことができる。一方で、第二言語として学んでいるはずが、いつのまにか母国語が外国語に侵略されてしまうかもしれない。また、国際的な場面での不平等が生じてしまう。

3.2 シンガポールとマレーシアの言語政策

①シンガポール

国語はマレー語、公用語には英語、マンダリン(北京語)、マレー語、タミール語の4つが制定されている。また、人口としては中国系が74.3%と多く、次いでマレー系が13.3%、インド系が9.1%と続く。シンガポールでのマレー語は国語であるが、実際には象徴的な役割でしかなく、英語が教育言語として使用され、日常会話もほとんどが英語で行われる。マレー語が国語として制定された理由として、1965年のマレーシアからのシンガポール独立にあたり、マレー語を公用語とするマレーシアやインドネシアなどの近隣諸国との調和を保つ必要があったことが大きい。この小さな島国が生き残るためには、国際的な関わりがなにより必要であり、国際的に開かれた社会やそれに見合う人材を養成することが急務であった。そうしてシンガポールでは、

教育言語として英語が使われ小学校からの授業は基本的に英語で行われるようになった。今では英語能力指数が113國中2位と高い水準となっている。また、第二言語としてマンダリン語、マレー語、タミール語のいずれかから基本的に親の母国語を学ぶ。シンガポールの文部省は「二言語政策とはそれぞれの子供が商業、工学、行政の分野で必要な英語能力と、文化的遺産としての母語の能力を習得することを提供すべきものである。」という見解を示し、二言語政策をとっている。また、シンガポールの英語教育の特徴として、能力別教育が挙げられる。小学校で基礎を学んだあと、能力別にクラスが分けられたり、試験を受けてコースが分けられたりする。これによって個人の能力に合わせた教育を受けることができ、スキルを高めることができる。一方で選別主義的傾向が強いともいわれている。このように、シンガポールの言語教育は「グローバル化」的であるといえる。

②マレーシア

国語も公用語もマレー語であり、準公用語として英語が設定されている。人口はマレー系が69%、中国系が23%、インド系が7%を占めている。マレーシアでは1969年、5.13事件と呼ばれるマレー人と華人の人種抗争が勃発したことを契機にマレー人を優遇するブミプトラ政策が進められた。この時に公用語を国語のマレー語のみに限るとした。また、イギリスの植民地から独立するときに発足されたマラヤ連合は英語、マレー語、華語、タミール語をそれぞれの教授言語とする4種類の民族語別の学校体系を認め、4言語を尊重する立場をとった。このようにマレーシアは、マレー語やそれぞれの民族語が尊重される「国際化的」な政策がとられている。マレーシアには国民学校と国民型学校の2種類の小学校があり、国民学校はマレー語のみを教授言語としており、その他の言語(中国語、タミール語、英語)を教授言語として使用する学校は国民型学校とされている。中学校の授業は基本マレー語で行われており、中国語やタミール語は公立の中等学校では認められておらず、私立の中等学校だけに認められている。また、小学校から英語・数学・理科を英語で教えるという方針をとり、国語の授業では英語、マレー語、中国語の3言語を習っている。しかしながら、ブミプトラ政策でマレー語を重視しすぎたことで英語力の低下が懸念され、近年では国際的競争力の向上を目指し、教育現場における英語力強化が推進されている。このような言語政策は、各民族のアイデンティティをもち続けるための母語教育、マレーシア国民であるための国語教育、そして国際化のための英語教育、というそれぞれの観点から他民族国家であるマレーシアにとって必要であると言える。しかし、先に挙げた教育政策や、マレー人が過半数を占めていることから、やはりマレー語が重視されていると言える。

4. 結論

グローバル化はコミュニケーションをとるうえでの効率が良くなるなどのメリットがあるがグローバル化することでの懸念点が多く、言語を1つに統一するよりも母国語を保護する方が理想的であるといえる。したがって、各国の言語は保護されるべきである。しかし、産業の高度化、発展のためには英語教育も欠かせないということがわかった。日本の文部科学省は「日本

はアジアの中でトップクラスの英語力を目指すべき」と示しているが、それにも関わらず日本の英語能力指数は88位と低い。このことから、日本は日本語を守りつつグローバル化も進めていく必要があることがわかった。国際的競争力を持つためには英語が必要である一方で、アイデンティティや国家統一のためには母国語や国語が必要であり、これらのどちらを重視するかが国の言語政策に大きく関わってくるだろう。また、シンガポールやマレーシアの政策から、国民の英語力は教育言語に大きく影響されると考えられる。ここから、これは日本の英語力が低い要因でもあると言えるだろう。一方で、日本で日本語が教育言語とされている限り日本語が減びることはないとも言える。どちらの調査対象の国も二言語教育、あるいは多言語政策をとっているにも関わらず、政策上重視していることが異なることで教育に大きな違いが見られた。そこで、日本も言語教育の目的をより明らかにしていく必要があるだろう。2国の例から、日本においてより英語を浸透させることを目指す場合、能力別教育や他教科を英語で教えること、日本語を保護していくことを目指す場合、日本語に対するアイデンティティを重視するブミプトラ政策のような政策をとることが有効であると考えられる。

5. 今後の課題

日本の言語教育において国際化とグローバル化はどのようなバランスで行われるべきか考えたい。また、現在までに言語がどのように変化し、広がってきたかを調べることで言語のグローバル化について考えたい。

6. 参考文献

- 齋藤 光代(2005)「マレーシアにおける言語政策についての考察」
施 光恒(2022)「「グローバル化」と「国際化」の区別を」産経新聞(2022年4月25日)
田崎 亜希子(2021)「マレーシアの国民形成における華人の統合に関する研究—その様態の考察とコミュニケーション政策の役割の検討を中心に—」
野口 美紀子(2022)「マレーシアの英語教育の実際と国際理解教育の実践について」
矢頭 典枝(2015)

<http://www.tufs.ac.jp> > ilr > _userdata > 59-75_Yazu